

1. 平成23年度の研究成果の概要



高橋 都
(獨協医科大学公衆衛生学講座)

はじめに — 本シンポジウムの構成について

本日のプログラムは盛りだくさんになっておりますが、最初のセクションはおもに治療を受けるご本人と、そのご家族に関する発表で構成されています。

次のセクションでは産業保健スタッフあるいは臨床スタッフによる支援の実態についてご報告いたします。

最後に、本日は本当にいろいろな背景の方にご参集いただきましたので、できるだけ時間を確保して、このプロジェクトを今後どのように発展させていったらいいのか、「がんと就労」全般についてみなさま方からのコメント、アドバイスなどを頂戴したいと考えています。よろしくお願いします。

では最初に、この研究班の23年度の研究成果の概要について報告させていただきます。昨年(2010年度)の成果報告会でもお話ししましたが、この研究班は3つの目的を有しております(スライド1)。

研究班の目的・概要・経過・メンバー

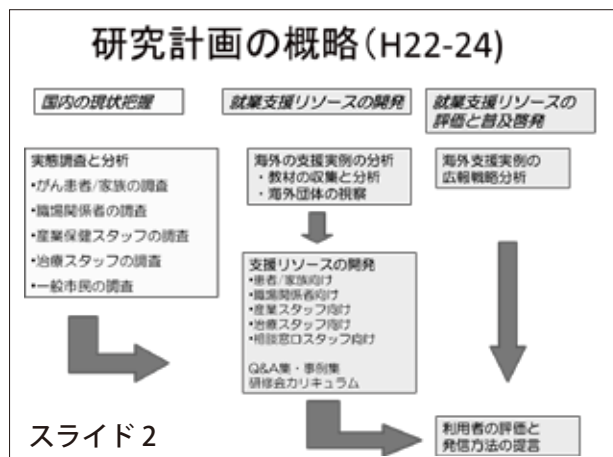
第1に「わが国のがん患者と家族の就業実態と情報ニーズ、さらに就業の阻害する要因をさまざまな角度から明らかにする」こと。第2に「職場関係者、産業保健スタッフ、治療スタッフなどさまざまな立場の方の認識や支援実態を明らかにし、支援力向上への課題を明らかにする」こと。そして第3に「さまざまな各関係者に向けて、教材と教育カリキュラムを開発して、それを評価するとともに、国民に向けた効果的啓発の方策を提言する」ことです。教材を開発しても必要とする方の手に届かないと意味がありませんので、効果的な広報のありかたについてもぜひ考えていきたいと思えます。研究が目指すのは以上の3つですが、研究班として活動するプロセスの中で、さまざまな関係者に広く開かれた前向きな議論のフォーラムをつくること

目的

- わが国のがん患者と家族の就業実態と情報ニーズ、さらに就業の阻害要因を明らかにする
- 職場関係者、産業保健スタッフ、治療スタッフの認識や支援実態を明らかにし、支援力向上への課題を明らかにする
- 各関係者に向けて、教材と教育カリキュラムを開発・評価するとともに、国民に向けた効果的啓発の方策を提言する

そのプロセスで・・・
さまざまな関係者に開かれた、
前向きな議論のフォーラムをつくる

スライド1



を重要視しています。


この研究班は平成22～24年の3年間のプロジェクトで、今年度は2年目ですが、大きく申しあげて研究計画には3つの柱があります(スライド2)。まず、さまざまな登場人物の実態調査を通じて、国内の現状を把握することです。そしてその結果にもとづいてさまざまな関係者に向けた就業支援のリソースを開発することが次の柱です。その開発に当たっては、昨年ご報告いたしました海外の支援教材の分析なども活かしていきます。そして、できたりソースについては想定される利用者の方々にβ版を見ていただき、コメントをいただき、そして発信方法についての提言もいただきたいと考えています。本研究班では、研究者だけが活動するのではなく、実際ががん診断・治療を受けた方が今よりも楽に、自分らしく働いていけるような世の中を創るためにはどうしたらいいか、さまざまな立場からインプットいただき、それを社会に発信していきたいと考えています。

勉強会については平成22年度、23年度で計8回開催させていただきました(スライド3)。毎回60名ほどの方がご参加くださり、実際に治療を受けた方の体験談あるいはさまざまな病院や企業のグッドプラクティス(好事例)の発表などをやってまいりました。最初は医療従事者や研究者の参加が多かったのですが、回を重ねるにつれて企業関係者の方、産業保健スタッフ、メディア関係者などさまざまな方が参加して下さるようになりました。明らかに仲間が広がったという実感があります。毎回の勉強会、シンポジウムに関しては総合討論も含めてすべて報告書にまとめております。本日は見本だけ持ってまいりましたが、過去の報告書をご希望の方は、どうぞホームページの方からお申し込みください(<http://www.cancer-work.jp/>)。残部がないものからPDF公開をさせていただいています(スライド4)。

この研究班にはスライド5に挙げたようにさまざまな背景の者が集まっております。23年度には春名由一郎先生と錦戸典子先生に新たにご参加いただきました。春名先生は、(独)高齢・障害者雇用支援機構障害者職業総合センターで障害者の労働衛生、労働福祉行政などをご担当です。がん患者の就労を考えるについて、障害や難病を持つ方々の就労とどのような共通点、相違点があるかも含めて、貴重なコメントをいただいております。東海大学の錦戸典子先生は産業看護学のご専門です。研究班に、産業保健師・産業看護師の視点を新たに入れてくださっています。

**開かれたフォーラムの形成
「がんと就労」勉強会・シンポジウム**

- ・ 勉強会 H22, 23年度で8回開催
- ・ 毎回約60名参加
- ・ 体験談、Good Practiceなどの発表
- ・ 患者、家族、企業関係者、産業医・産業保健師、臨床医・看護師、メディア関係者、研究者、行政/政策関係者など
- ・ 成果報告シンポ



スライド3

**開かれたフォーラムの形成
「がんと就労」勉強会・シンポジウム**

過去の報告書は研究班HPから申込可
<http://www.cancer-work.jp/>



スライド4

さらに昨年のシンポジウムでは、ご参加の方から「研究者だけが頑張るのではなくて、当事者の声をもっと活かした方がいい」というご意見をいただきました。そこで23年度からは、「患者作業部会」を立ち上げました。本日もご発表くださいますが、ネット調査についてたいへんご尽力をいただいています。

それから「医療ソーシャルワーカー部会 (Medical Social Worker:MSW部会)はただ今立ち上げ準備中です。ソーシャルワーカーとして相談窓口で働いている方々に向けてネットワークをぜひ広げたいと思います。

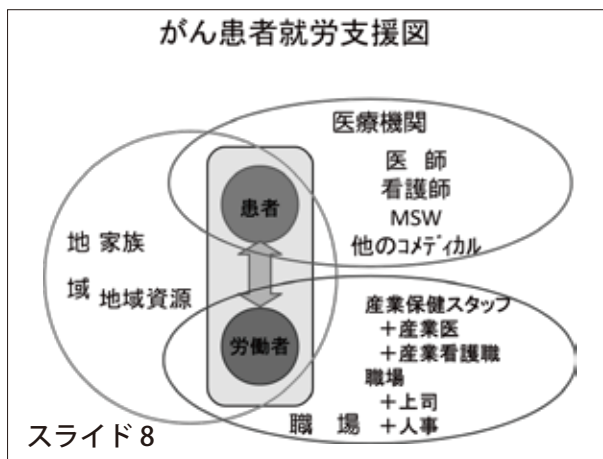
こうしたさまざまな背景を持つメンバーがざっくばらんに話し合っているのがこの研究班です (スライド6、7)。

がん患者の就労支援に関係するそれぞれの立場

今年度の第2回班会議で話し合いをしていた時に、森晃爾先生 (産業医科大学) が「本人をとりまく就労支援図はこんな感じではないか」と、アイデア図を描いてくださいました。それがスライド8です。治療を受けるご本人は医療機関にいるときには患者という立場です。しかし勤務先では労働者として働いています。お一人の中に二つの側面があるのですが、たとえば医療従事者はご本人の患者の側面についてはよくわかりますが、その方の働き方や、職場の上司や人事労務担当者はどういう方なのか、さらに産業

研究班メンバー		★ 患者作業部会 ★ MSW部会
氏名	所属	専門領域
高橋 都	産科医科大学 公衆衛生学講座	公衆衛生学、精神神経学、社会調査 (がんサバイバシップ研究)
甲斐一郎	東京大学大学院 医学系研究科	疫学、老年社会科学、社会調査
多賀谷信美	産科医科大学 腫瘍病棟第1外科	消化器・内分泌外科
丸 光恵	東京医科大学 産科看護科	小児・思春期看護学
武藤孝司	産科医科大学 公衆衛生学講座	公衆衛生学、産業保健
森 晃爾	産業医科大学 産業医実習研修センター	産業医学
和田耕治	北里大学公衆衛生学	公衆衛生学、産業保健
春名由一郎	(株)高松・障害者雇用支援機構 障害者職業総合センター	障害者の労働衛生・保健福祉行政
鏡戸典子	東海大学健康科学部	産業看護学

スライド5



保健スタッフがいるかどうかまでは見えません。

逆に職場単位で考えますと、その労働者が受けている治療の内容や治療スケジュールまでは、職場の人間にはなかなか見えにくいところがあります。

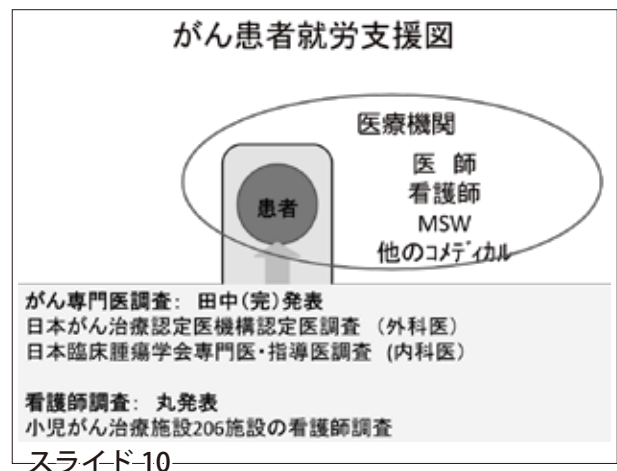
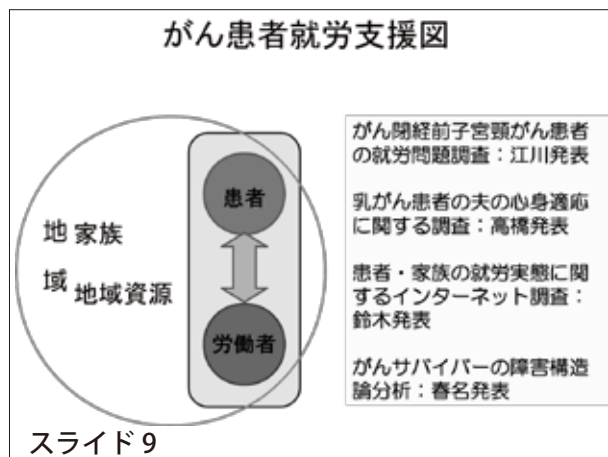
患者の側面と労働者の側面も持つその個人は、地域・コミュニティの中で暮らしているわけですが、そこには当然、支えるご家族がいます。またそのコミュニティの中のさまざまな資源があります。一口に資源と言ってもいろいろあります。患者会もあるかもしれません、人事労務の問題に詳しい社会保険労務士さんがいるかもしれません。また特定の医療機関を超えて相談に乗るがん診療連携拠点病院の相談窓口があるかもしれません。

治療と仕事を両立させようとするご本人の問題を考えるときには、いくつかの光の当て方をしないと総合的に見えてこないものがあります。研究班にはいろいろな専門家が集まっていますので、全体会議をして話し合いをすると、自分の背景で見えやすいもの、見えにくいものをかなり意識することができます。それがさまざまな背景の者が集まっている利点ではないかと思えます。

本日は23年度に実施したさまざまな実態調査と、今後考えている活動などについてひとつひとつご報告してまいります。

まず地域という視点からは「閉経前子宮頸がんの治療と患者さんの就労問題について江川京子さん（東京医科歯科大学）から、「乳がん患者の夫の心身適応と就労問題」について高橋から、さらに「患者と家族の就労実態インターネット調査」について患者作業部会の鈴木信行さん（患医ねっと）から、そして「がんサバイバーの就労問題の障害構造論による分析」について春名由一郎先生（障害者職業総合センター）からそれぞれご報告いたします（スライド9）。

次に医療機関に着目した切り口からは、がん専門医調査と看護師調査についてご報告します。昨年のシンポでは、がん専門医調査について、日本臨床腫瘍学会専門医・指導医調査をご報告しました。それはおもに内科医の調査でしたので、フロアから外科医の視点も知りたいというご意見が出され、今年度は外科医の調査も実施しました。本日はその2つをまとめて田中完先生（新日鐵名古屋製鐵所）からご発表いただきます。看護師調査についても丸光恵先生（東京医科歯科大学）からご発表があります（スライド



10)。

職場の視点からは、産業保健スタッフについて、専属産業医のインタビューを通じた復職支援の調査、さらに産業医や産業看護職で構成されている日本産業衛生学会の専門医・指導医調査の結果を田中宣仁先生(産業医科大学)からご発表いただきます(スライド11)。また、産業看護職による復職支援活動の実態調査について、吉川悦子先生(東京有明医療大学)、錦戸典子先生(東海大学)、岡久ジュンさん(東海大学)からご報告いただきます。

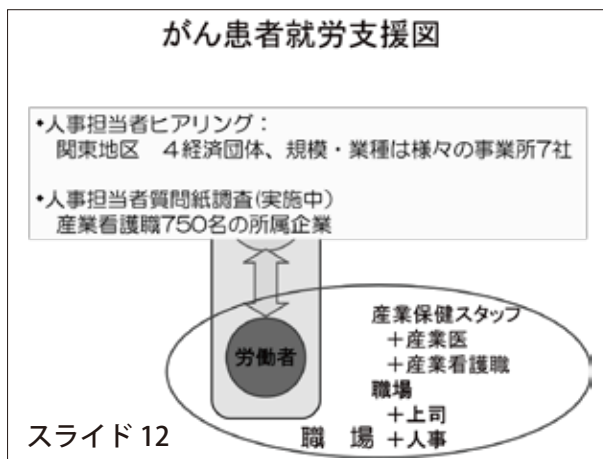
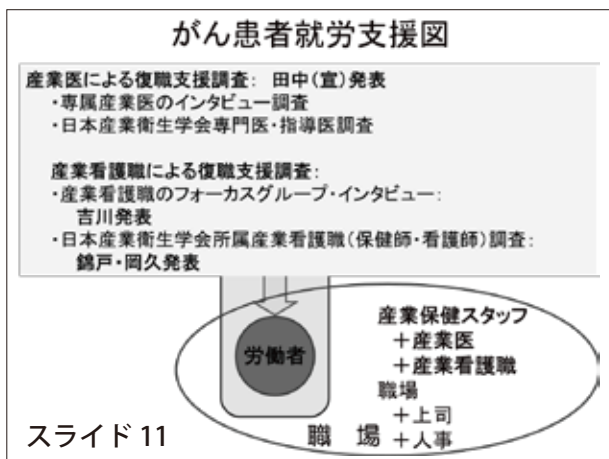
以上のように今年には多くの実態調査を実施しました。結果についても、ぜひコメントを頂戴したいと思います。

人事担当者へのヒアリングから

職場の上司、人事については、昨年度、関東地区の経済団体や会社のご協力をいただいて、人事担当者の方々へのヒアリングを行いました。加えて、産業看護職の調査を通じた人事担当者の質問紙調査が、現在進行中です(スライド12)。

ヒアリングについては昨年度ご報告しましたが、ごく簡単にまとめます(スライド13)。人事担当の方も色々なことに困っておられます。具体的には、従業員の様子が何かおかしいと思った時、病名や病状をどこまで聞いたらいいのだろうか、というコミュニケーションの問題があります。それからご本人の就労パフォーマンスに波がある時に会社としてどう対応するか。さらに就労のパフォーマンスが下がっている時にカバーしてくれる同僚の不公平感にどのように対応したらいいか。またこれはとても大きいと思いますが、企業活動の質の維持と従業員の支援のバランスをどう考えたらいいか。そのような意見があげられました。

そして具体的にほしい支援として、他の会社がどのようにしているのか、あるいはこういう時にはどうしたらいいという『Q&A』集を、さらにそれではすまない時にどこに、あるいは誰に相談したらいいか。さらに人事労務担当や経営者、あるいは直属の上司が主治医とコミュニケーションをしたいと思った時に具体的にどう動いたらいいか。そのあたりについてのサポートがほしいという声をうかがいました。



さまざまな支援ガイドブックの作成

このように多角的に、今年度の活動を続けてきました。これらの実態調査にもとづき、現在、研究班では、さまざまな登場人物に向けた支援ガイドブックを検討しているところです(スライド14)。

たとえばご本人・ご家族向けには「Q&A集」や「事例集」にするのか、そのかたちについて、現在、患者作業部会でネット調査の自由記述の分析などを通して考えています。

職場関係者の方々に向けての対応ポイント、事例、関連法規などをまとめた資料も検討中です。

治療スタッフ向けについては、研究班のホームページですでに公開していますが、就労支援に向けてとてもいい実践をしておられるがん専門医の方たちにヒアリングをした結果をまとめた「実例に学ぶ：臨床医向け5つのポイント」を作成しました。これについては、田中完先生の方から後ほどお話をいただきます。

産業保健スタッフ、とくに専属の産業医ではなく、全国に8万人いると言われている、月に1回職場巡視に行くような非常勤の産業医向けのガイドブックについても現在検討中です。これは立石清一郎先生(産業医科大学)からご発表があります。

患者相談窓口の相談員の方々に向けたガイドブックもあった方がいいでしょう。それについてはMSW部会などでこれから検討を進めていく予定です。

これらについてはいずれもまずβ版をつくり、その後で、想定する利用者の方々に見ていただき、これが足りないとか、これは現実的ではないとか、具体的なフィードバックをいただきたいと思っています。フィードバックの集め方については、検討会を開くか、あるいはホームページなどで広くおうかがいするのか、具体的方法についても現在検討中です。できるだけ広い範囲の方々にコメントをいただきたいと思いますので、意見の集め方も含めて、本日みなさま方からアイデアをいただければ大変嬉しく存じます。そして利用者評価、修正などを経て24年度中に完成版の公表まで持っていきたいと思っています。

ガイドブックと一言で言っても本当にいろいろあります。就労と言っても、たとえば休職から復職する場面、継続就労をしていく場面、あるいはいろいろな事情でいったん退職した後、新規就職をしようとする場面などで、事情はまったくちがってきます。

がん患者の就労に関する人事担当者ヒアリング

関東地区 4経済団体、規模・業種は様々の事業所7社

◆何に困るか？

- 病名や病状に関するコミュニケーションのありかた
- 本人の就労パフォーマンスの問題
- 同僚の不公平感への対応
- 企業の存在理由：企業活動の質維持と従業員支援のバランス

◆ほしい支援

- 他社の対応事例
- Q&A集、相談窓口
- 主治医とのコミュニケーションの橋渡し

スライド 13

作成中の支援ガイドブック

- 患者・家族向け：Q&A集、事例集など：患者作業部会
- 職場関係者向け：対応ポイント、事例、関連法規など
- 治療スタッフ向け：「実例に学ぶ：5つのポイント」
- 産業保健スタッフ（特に非専従産業医）向け：立石発表
- 患者相談窓口スタッフ向け：MSW部会
医療費支援、生活支援、関連法規など

★ β版作成→ 利用者評価→ 修整→ 完成版公表

- ・ 復職・継続就労・新規就職場面
- ・ がん種類別

★ ガイドブック広報方法の検討

★ ガイドブックを用いた研修会やe-learningなどのカリキュラム検討

スライド14

そして、その方がどのようながんで、どんな治療を受けられたのか、また、会社の業種、職種、事業所規模、ご本人の職位など、実に多くの文脈がありますから、これを全て網羅するのはなかなかむずかしいかもしれません。それでも、なにか手にとって読むことができ、ヒントになるようなたたき台があれば、そこから実践を広げていくことは可能だと思います。

この研究班ではさまざまな登場人物の方々に向けた支援ガイドブックをまず立てて、そして吟味していただくと考えています。

あと1年のプロジェクトですが、ガイドブックの作製、広報、そしてその後、研修会やe-learningも含めてどのようなかたちで広めていくか、検討していく予定です。

以上概略についてお話ししました。

質疑応答

丸(司会) 高橋先生ありがとうございました。それでは会場のみなさまから、ただいまの「研究成果の概要」と次年度の計画等に関してご意見、ご質問をお受けします。

会場発言A 民間企業の機械メーカーに勤務しております。厚生労働省のがん対策推進基本計画の次年度の構成に「がんと就労」という問題が入ると発表されましたが、あの厚生労働省のがん対策推進協議会の構成メンバーとこの研究班の絡みについてはいかがでしょうか。先生も厚生労働省の協議会に出席されて発表をされていますが、どのような位置づけになるのか教えてください。

高橋 ありがとうございます。非常にだいじなポイントです。がん対策基本計画の重要項目の、24年度からの5カ年計画の中に「就労支援」という項目が入りました。それが具体的にどのような施策に結びついていくかについては、これからだと思います。本日もがん対策推進室のスタッフの方がご参加くださっていますが、どのように具体的な施策にこの研究班の活動あるいはこの後の活動が貢献できるか、厚生労働省とも密に連絡をとりながら進めていく予定です。

ぜひみなさまにお願いしたいのは、そういうパイプもあるのですから「こういうのはどうだろうか」といったアイデアを寄せていただきたいのです。ご指摘の通り、ぜひ密に、現実的なところを考えていきたいと思っています。

丸(司会) それでは高橋先生ありがとうございました。